

するという（浜本満一九八五「憑依靈としての白人」『社会人類学年報』一二）。世界各地に類例の多いこの種の語りもまた、再び日本の事例との類似を示す。一八七一年、明治の新体制への不満から一揆が起きた。外国人医師が標的となり、外国人は血や肉を食べるという噂を民間宗教者が流した。これは山人が血や脂を絞るという民間伝承の「脂取り」を基にしているという（小松和彦一九九五「異人論」『岩波講座現代社会学』三）。この種の語りをモダニティと関連付けることは容易である。他方、遠方の住人とされるような異質な人々との接触や材の蓄積に、悪魔の像と結びつく傾向があることは確かである（cf. Comaroff and Comaroff 1999 *Occult Economies and the Violence of Abstraction. American Ethnologist* 26:2）。いのいへは、悪魔言説をセダニティと関連付ける議論を支持するというよりも、むしろその恣意性を照射している。

他方、悪魔の語りをめぐる研究に新たな課題を見出す端緒もまた、恐らくは調査地で出会う事例の中に見出される。宗教概念や更には経済や医療といった領域を当事者の語りや実践に即して再画定する作業は、民族誌を通じた我々自身の想定を問いか直す契機となる。このことを、負傷者の病院での治療と祈りをめぐるドゥルマの事例から指摘した。

ユダ、イエスを出しぬく
——ガアテマラ・マヤ系先住民の聖週間——

大村 哲夫

ガアテマラ高地のマヤ系先住民は、スペインによる征服によってカトリック化させられ復活祭を祝っている。しかし、ツツウヒル語族の村、サンチャゴ・アティトランでは、先スペイン時代からの神とされる「マシモン」が祀られており、地域を超えた信仰を集めている。マシモンは、カトリックの信徒集団コフラディアによつて祀られているが、復活祭では奇妙で不思議な役割を演じる。本稿では、カトリックとマヤ宗教の関係と、その要となるコフラディアの働きについて、二〇一六年から二〇一九年の調査とともに考察したい。

コフラディアは日本の「講」に類似しており、民間人によつてカトリック聖人の護持を担うと共に、教会外の祠で聖人像を祀る。聖人像本体はカトリックの伝統に準じているが、衣裳などは村の伝統に基づくものが身につけられ、祠の装飾も色取り取りで豊饒でありマヤ色が強い。また聖人像は複数祀られるが、「マヤの王」、「トウモロコシの神」、「湖の神」「織物の神」、「家畜の神」、「安産の神」などと解釈されており、マヤの神々が重ね合わされていることが推察される。この村には十ほどのコフラディアが存在する。

マヤの神マシモンは、イエスの聖柩を祀る聖十字のコフラディアに祀られているが、実態はマシモンの祠といつてもよい。マシモンの本体は聖なる木に彫られた老人の面であるが、ソンブレロを被り、ネクタイを締め、奉納された夥しいスカーフを

纏い、民族衣裳の刺繡入り七分ズボンを穿くという異様な姿で、葉巻を銜え酒を飲む。ここでは病氣治しやト占、商売繁盛、清めや祈禱など様々な民間信仰が行われている。このマシモンがキリスト教の復活祭に登場するのである。

聖週間になるとマシモンは教会廻廊の一隅に吊される。恰もイエスを壳ったユダのようだ。聖木曜日には「最後の晚餐」が

行われ、深夜イエスが「十字架の道行」をし、サンファンがマリアに凶報を伝えるパフォーマンスが夜通し行われるが、マシモンはコフラディアのメンバーに守られて吊されたままである。聖金曜日早晨、イエスらが教会に戻ると、教会の床にある「世界の贍」が開けられ、マヤの祈禱師によつてロウソクの祝福が行われる。この「贍」は東西南北へ向かうトンネルと繋がつているとされる。イエスは人々の悲しみの中十字架に付けられ、「世界の贍」に立てられる。これらの行事は各コフラディアの協力で進められるが、十字架を前にした説教はカトリック司祭が行う。教会広場では、もう一つの十字架が立てられ、カトリック司祭による祭儀が行われる。広場ではただちにイスが聖柩に納められ、巨大な山車に載せられ、マリアの乗る山車と共にマシモンの吊された角を通して街に向かう。教会内では、やはりイエスが聖柩に移され山車に載せられ、教会から広場に降りる。山車は、数歩進んでは下がるという牛歩以下の歩みで、群衆で埋め尽くされた広場を静かに進む。二時間ほど経つと何の前触れもなく「復活」したマシモンがコフラディアのメンバーの肩に乗つて登場し、軽快なステップと音楽で群衆の中を踊りながら彷徨い歩く。聖柩の静かで悲哀に満ちたプロセ

スの柩は何事もなかつたかのように進み、さらに一晩中村を練り歩くのである。

他地域では吊されたユダは聖木曜日に焼かれるが、マシモンの「死と復活」は、まさにイエスの復活を出しぬいている。カトリックとマヤ宗教、それをつなぐコフラディア。決して「混淆」ではない重層性にしたたかさと誇りを感じる。つい二〇年前には、軍事政権によつて子どもを含む村民が虐殺され、神父を殺害された経験をもつこの村の祭は、奥が深い。

カナダ、クリー族のサンダンスとウーマンズ・セレモニー

谷口 智子

カナダ・クリー族の「ウーマンズ・セレモニー」の現地調査のため、二〇一九年五月一四日～五月二〇日まで約一週間、カナダ合衆国サスカチュワントン州ホーリーレイク居留地で現地調査を行つた。「ウーマンズ・セレモニー」は、クリー族でメデイスン・マンたちが夢見によって発見し、近年創造された女性儀礼である。五月の満月の前に四日間、女性たちだけでティピに籠り、歯も磨かず、入浴もせず、トイレ以外は外に出てはいけない「籠り」の期間である。ティピの中で火を焚き、四日間それを絶やさず、守る。谷口は、クリー族で近年創造された「ウーマンズ・セレモニー」に準備段階から参加することによつて、